

さん ぶつ 讃 仏

■ 楽曲データ

歌詞：真船正巳 作詞

楽曲：山田耕筰 作曲

発表：仏教音楽協会 1930年

初演：—

初出：『仏教聖歌 第二回発表』 佛教音楽協會 1930年

管理番号：M0973

■ 創作の経緯

仏教音楽協会より「仏教聖歌」として発表（第2回）。詞は第3回懸賞募集（1929年）の当選作で、『中外日報』（1929年10月29日付）に掲載された。曲は同協会からの委嘱により同年12月5日に作曲。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『佛教聖歌 第二回発表』 佛教音楽協會 1930年

比較資料1：『佛教聖歌縮刷第一輯』 佛教音楽協會 1938年

比較資料2：作曲者自筆譜（明治学院大学図書館付属日本近代音楽館所蔵）

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

◆ 歌詞について

歌詞は、今から90年近くも前のもので、文語体で書かれています。各連とも五七調の4行のあと、5行目に「あなほとけ」とあり、仏を讃えて終わっています。

1連目に「三千とせの遠きむかしに」と出てくるように、仏教を明らかにしてくださいましたお釈迦さまを讃える歌ととらえてよいようです。

◆ 作曲者・曲について

作曲の山田耕筰（1886～1965）と西本願寺との関係は、1917（大正6）年秋、渡米する船中において山田が発病し、療養のためハワイに滞在した頃から始まっています。当時ハワイ別院には、彼の教え子の一人である澤康雄（1888～1931、《恩徳讃》旧譜の作曲者）が、ハワイ開教区本部の職員として勤めていたことが、縁となったのでしょうか。

仏教音楽協会が設立され、仏教聖歌の発表を始めると、毎年のように作曲を委嘱され、《讚仏》《求道の歌》《法隆寺》などの作品を寄せています。戦後には《芬陀利華》なども作曲しています。

◆歌い方について

- ①はじめに「荘重に」という指示があります。4分音符＝66は、秒針の動きよりわずかに速いテンポになります。
- ②曲冒頭の低い「レ」は、丁寧に音をあわせて歌いだせるように練習しましょう。どのような曲も、歌いだしの音をそろえることに十分配慮してください。
- ③1小節目から4小節目にかけて、同じ上昇音階を2回繰り返します。ここを、レガートで（なめらかに）歌えるように練習しましょう。特に、「レ」→「ソ」の音程に注意して。1回目と2回目の音量の変化にも気を配りましょう。
- ④5小節目の「ミ♭」→「ソ」の動きは、音程をずりあげないように。
- ⑤6小節目、8小節目の「レ」の音が、伸ばしているうちに下がらないよう、しっかり支えましょう。
- ⑥8小節目4拍目の4分音符から12小節目3拍目までは、明るくのびのびとした声で歌いましょう。
- ⑦16小節目3拍目のあとは息継ぎを十分に、そして、「あ」をしっかりと響かせましょう。
- ⑧最後の「ほとけ」は、声を潜めてしみじみと歌いましょう。
- ⑨最終小節（18小節目）の付点2分音符では、旋律の音が伸びている間に和音が変わります。その変化を感じて音を保ちましょう。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 10（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第135号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.